

# 子どももの目とまちへの関心

①鶴見川子ども発見団活動報告  
②地域に広がる学習の場

## ①鶴見川子ども発見団活動報告

久保田正男

一——子ども発見団の活動

### ①発見団発足の動機

今日、せせらぎ緑道、緑の小径、神奈川宿歴史の道と必死の再生の試みがなされながらも、その大半を暗渠化し、川の存在すら忘れられてしまった滝の川を見ると、今改めて私達発見団の活動の意味が問われているようではない。幼い日々の思い出のつまった滝の川と再び出会ったのは、昭和五十年神橋小学校に赴任した

時であった。川への憧憬を五年生の児童と共有したい願望から出発した調査ではあったが、目の前の滝の川は、水こそ流れていても、美しい川ではなかった。

児童の言葉を借りて言おう。

「『川をきれいにしよう』と、何度繰り返しても、川はきれいにならない。私達がいろいろな角度から川に取り組んでいけば、私達の心の中に、川をきれいにするのは私達であるという自覚が生まれるはずである。そのことをバネとす

一——子ども発見団の活動  
二——子どもに対する施策への提言

れば『私たちの川』という思いが強くなり芽生え、それが真に人々に訴える力となるのだ」。調査の結果から出て来たのは、強い決意であった。小さな川にもこんこんと湧く水源があること、河川の流れをたどれば町の風景が異なること、潮風の吹く河口の岸壁では荷を上げ下ろしする外国船が停泊していること、それらを肌で感じた子どもたちは素直に感動した。その上、町の人々は川の汚れを不思議がらずに、調べる人間を珍しがっていたという事実から、既



にして自分達の役割を意識したのである。いかに汚れた川とはいえ、自然に触れることで、単なるイメージとして川の姿をとらえたのではなく、また、思い出として川を心の奥底にしまいこんだのではない。子どもたちの内面に、川に働きかけるエネルギーとしての「私の川の意識」を強烈に刻み込んだのである。

次のステップは、戸部小学校の帷子川子ども

発見団に引き継がれた。正式名称としての『子ども発見団』はここに誕生したのである。

当初の目的は水源捜しであり、多くの市内の川を歩き回った。

原則的に川調べとは、今もなお、この歩くという事で貫かれている。真夏のうだるような暑さの中、水筒一本の水だけで、川筋を求めて歩く。渴きと疲れ、靴ずれを起こした足が、もう前への歩みを拒否し始めた頃、めざす水源に到達する。この体力テストの結果は、不思議とどの児童も同じ合格点に達することができる。

○川は汚くて、臭い。本当にそうだ。

○色々の工夫された橋もあるが、大体は同じで、よくも続くコンクリートの護岸であるところか。

○汚い川だって魚がちゃんと泳いで暮らしている。

○水源があって、川ができる。

○川は一本ではない。多くの支流が支えている。

○（外見として）川全体が汚れているのではなく、一部にはきれいな流れもある。

○なぜフェンスがあって、川は私達を拒否するのか。

○なぜ人々は、汚い川に疑問を持たないのか。

そして、これらにプラスして、何より、自分の知力・体力のなさ、自然の大きさということに悟らされ、本当の自分に気付くのである。

初期には、橋をその手掛かりに、詩作や版画等を加え記録にまとめさせた。しかし、この方法は方法的に発展性がなかった。優れた書き手を第一条件としたことから、少数であってもよしとしてしまった点で、「人々に働きかける活動」であったはずのものが、中核の児童が少数では運動とならないのである。

この欠点を補うために、特に社会科の学習では、学年の児童を総動員するような形で、地域学習を進めた。

四年 平沼新田（郷土の開発）

五年 平沼地域の工場（日本の工業）

六年 地域の歴史から発想（日本の歴史）

老人ホーム（暮らしと政治）

こうした学習は、あくまでも教育課程に基づくものであって、興味関心を地域に向けてという範囲を出るものではない。児童を川に引き付けようとする意図は、川を歩かぬ限り、「自然」の視点を無視して成り立つものではない。

この点で、発見団の大きな転機となったのは「湧水調査」である。

川には水源がある  
 ←  
 上流に行くと、幾つもの支流があり、その一つ一つに水源がある。  
 ←  
 つまり、川は『流域』の大小無数の湧水から生まれている。

川を歩きながら発見したこの考えに沿って、高島台、浅間台地区の湧水調査を行った。その結果、次のようなメリットが明らかになった。  
 ○流域を踏まえて川を見ることができるようになった。(川という線から流域という面への追及が可能となった)

- ・自分達の生活範囲の中にある研究対象物が見付かった。
- ・地域の人々の生活の様子、その変化を探ることが出来る。

○児童にも簡単にとらえやすい方法であり、毎日調査できる活動であるため、自主的な活動を保証する。

地形的——台地、谷戸、高低、分布  
 地質的——地層

水質的——本当の水、水温、水量

○都市における自然の意味の問い直しができる。

表 発見団の組織と活動内容

発見団	活動内容
NEW鶴見川子ども発見団 (主力中2・末吉中学校)	湧水調査、雑草絵本作り、古家古道調査、地名研究、樹木調査、砂の粒子調査、二ツ池生物調査
鶴見川子ども発見団(カラス) (主力小6・上末吉小学校)	水質調査、工場調べ(絵本作り)川の環境整備(カン拾い)
鶴見川子ども発見団(カルガモ) (主力小6・大豆戸小学校)	都会の中の水辺調査、大豆戸の歴史(湧水調査・古家調査)、樹木調査(種類、光合成反応)、温度調査(熱の分布)内庭に来る野鳥調査
大岡川子ども発見団 (主力小6・井戸ヶ谷小学校)	水質調査、街路樹調査
帷子川子ども発見団	大学生、高校生となったことから他の発見団に対する助言

②—発見団の組織と主な活動内容

この後、発見団を誕生させたが、いずれも帷子川子ども発見団をモデルに活動の推進を図ることとした(表参照)。

活動の柱は次のとおりである。

⑦—実行委員会

各組織の代表で構成、発見団全体の推進を図る。

④子ども会議(一昨年の例)  
 テーマ「見つめ直そう」

—わたしたちの川・緑—

毎年一回定期的に開催。発見団の組織的イベント

●目的

○川を中心とした研究や活動に対しての研究発表や体験報告の場とする。

○社会に対し、子どもたちの調査活動の独自性や柔軟な発想を示すと共に、川のかくれた魅力について訴える。

○今後定期的に発表の場を設けるための足がかりとする。

●運営

午前の部 全体会(各発見団の発表と討論)

午後の部 分科会

①川歩きの体験を語ろう。

②きれいな川にするにはどうしたらよいか。

③川や湧水に住む小動物を守るためにはどうすればよいか。

④小さな緑を守るために、私達になにができるだろうか。

⑤人と川のつながりをどう作ればよいか考えよう。

⑥アピールの採択

⑦小さな自然にも名前をつけよう。名前をつ

る。

写真-2 子ども会議 (61年) 大豆戸小学校にて



と名前があるんだ。

⑤ 遊べる川を作ろう。こんな川にしたいという、君の考えを教えてください。

⑥ 自分達は川を汚さない。一人一人の心がけが、川をきれいにすることなんだ。

### ● 陳情書の提出

① 横浜市内における湧水地点の保護について

② 川の自然保護にかかわる施策について

二通の陳情書を作成し、市長に提出した。

### ⑦ 調査研究活動

○ 全体行動——長期の休みや日曜日利用

水源探し、各発見団の調査方法の紹介、インタビュー作戦の練習

○ グループ行動——各発見団の目的に従っての常時活動

概略、以上の形で活動を進めている。

### ⑧ 活動の可能性と限界

団員は、心から帷子川を愛す。

○ 私達は、帷子川の水と空気と緑を守る。

○ 私達は、帷子川のすべての生物と共に生きると。

○ 私達は、帷子川のよさをすみずみまでも発見し、流域の仲間と共に、その喜びを分かち合おう。

帷子川子ども発見団結成時の『誓い』であ

る。ここには、発足時特有の意気込みと気負いを感じさせる言葉の響きがある。しかし、何よりうれしいのは、環境全体に対して負う、自分達の責務を自覚しているところにある。

次々と世代交代していく団員にとっては、誓いは過去の、別個の発見団のものではあっても、同じ活動の体験を積むことによって、必ず自らの言葉によって、この『誓い』を明言する。汚い川に、毎日千変万化する川の顔の表情に、自分の目で気付き始めたとき、同時に心の内部に発生する問題を発見する。それが行動エネルギーとなって、追求への意欲をかき立てるのである。

それ故に、私にとつての課題は、こうした一連の過程で、どのような働きかけが必要か見極めてかかることである。

① 子どもたちにとって魅力ある調査方法を提示して行く必要がある。

しかも、毎日川と対面する性質のものである。児童にとつての最大の武器は時間的余裕であり、この条件を最大限活用して迫れば、大人にはやれない環境チェッカーの大役を果たすことができる。

② 本当の川、水のきれいな川を見せ、そこで思う存分遊ばせることは、絶対条件である。

けて、みんなに知ってもらおう。

② 各地に発見団を作ろう。発見することは、生活をみつめ直すことです。山発見団でも、町発見団でもかまいません。自分達で作って、どんどん活動しましょう。

③ 水源・湧水を守ろう。川のもとには湧水。とつても小さい自然だけど、大切なものなんだ。

④ 小さな緑を守ろう。小さな芽を大事にして、大きく育てよう。雑草にだってちゃん

子どもたちの周辺の川の大半は汚れている。川に対する働きかけも、見ると見ないではだいぶ異なる。また、水のきれいな川で遊ばせた後、児童は自然の川の素晴らしさを訴えるが、その川も多くは人手によって整備された川であると理解させるなら、児童の自然観も賦与の自然という見方から脱皮したものと

なる。  
③子どもたちが組織的に連帯していける場を作る必要がある。活動評価の場、見方を広げる場、見通しをもって参加できる保証としての場を是非とも持ちたい。活動の継続は、こうした方法で外的に規制し、連帯という人的要素により内的結束を図ることが必要である。

これまでプラスの要素から、活動の発展を考えて来たが、逆の要素も多く見られるようになって来た。発見団内部で見られる現象としてあり、今後の環境問題のとらえとしても見過ごすことができない性質のものである。

川が暗渠化する、緑が減少するという過程は、都市化現象の下での人間の川離れ、土地利用の分業化が招来したもので、従来の自然観否定の過程でもあった。都市河川の掃きだめ化現象の裏には、川に万里の堤防を築き、洪水の危険なしの神話を疑いもなく信じた私達がいる。

無機化して、中の自然を解体することに何の抵抗も示さなかった私達がいる。また、自分達が川を汚している意識、言うなれば川に対しての加害者としての私達がいる。即ち、川にどう近づこうとも、既に大人ですら見えないのに、当然見えなくなっている子どもたちもいるということである。

テストで測られる子どもたちの学力は、かなり向上してきている。家庭での世話、塾等の補習体制で、子どもたちの一人一人に目が行き届いているせいでもあろう。

しかし、発見団の子どもたちを見ると、従来の子たちと比較して、力量はかなり落ちてきていることも事実である。それは、与えられる知識のえさに反応する速さは増したと言いうことであって、自ら考え解決するという真の意味での学力の不足ということである。前述した、見えなくなった子どもたちの幾つかの例を、この一年間の出来事を中心に、次に示すこととする。

○一人で参加出来ない。

・友達と一緒にすることが目的になっている。

○川を見ていない。

・問題を発見できない。なぜどうしてという以前に風景を見ていない。常に素通りして

しまう。

・川を歩いて迷子になる。上流、下流の別すらあやふや。

・以前の調査の体験を生かして見えない。

○見た事実がまとめられない。

・語いの不足も大きい。

・まとめの提出を義務づけているが、未提出のままやり過ぎそうとする。

○すぐ疲れる。

・水筒の水を途中で飲み干してしまう。

・自動販売機を頼る(原則として許可してない)。

・帰路乗り物に乗ると気を緩め、目的を忘れる。

・小休止で休むと、すぐゴムボールで遊ぶとする。今まで持ってくる子はいなかった。また、十分休憩しようという子が多かった。

○こうした活動に参加したがらない。親も勧めない。

発見団の児童にして、何等特別のこともなく、川離れをしている子どもたちでもあるのだ。前半にふれた子どもたちは、変革の主体者としての意識を深め、仲間達と盛んに連携し、より向上を目差そうとする故に、発見団の活動

をてこに学力全体の向上も格段のものがあつた。

この問題の解決のためには、こうした現状の子どもたちに対する児童観を明確にしていくことが必要である。大人すら川離れしている現状では、こうした問題は問題にならないであろうが、活動の中で発生した問題を丁寧に取り扱、問題は根の深いことにも気付くはずである。

自然の守り手として『子ども』に期待するならば、子どもたちの周辺で起きている問題に、もつと注意をはらう必要があるのではなからうか。

## 二——子どもに対する施策への提言

発見団の活動評価として、朝日小学生新聞に掲載された内容を、まず紹介する。

「河川をきれいにするとか、大事にするとかいう感覚を養うには、子どもの時代からの教育にしかないようです。アメリカの国立公園のマネー向上も大人に見切りをつけて、二〇年以上にもわたり、子どもたちに教えてきたのが、今になって効果をあげているとの事です」（建設省都市河川室 松田専門官談）。

私はこの記事を、これからの活動は子どもを主体にすること、そのための、教育及び行政の

子どもに対する施策の提示を要求する文言として受け止めた。この章では、この点にふれて論を進めることとする。

### ① 子ども主体の意義と実例

松田氏は、自然教育の立場から唱えられているが、発見団の活動も、こうした視点から迫ろうとしていた訳である。しかし、本質的には、もう少し掘り下げて考えてみるべきである。前章の後半の子どもたちに働きかけることは、そう容易なことではない。

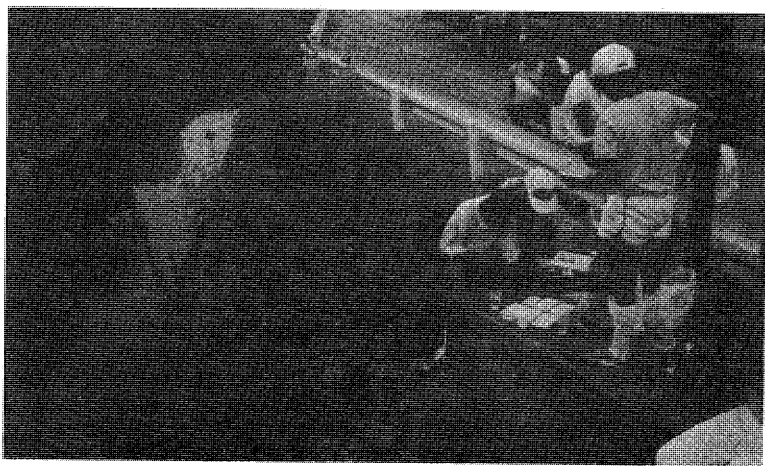
社会のひずみは、弱者の上に顕著に現れる。その弱者こそ、子どもたちなのである。例えば、都市化という社会現象が、私達の自然に対する意識を希薄なものにし、それを凝縮したものとして、現在の子どもたちが生きているということがある。従って、まず、為すべきことは、私達大人の責任において、川の再生をはかること、次にその再生過程に子どもたちを参加させ、作らせて行くことである。子どもたちのための会館を建設せよとか、子どもの考えでまちづくりをしようとか、いろいろな考えも出されているが、この点を踏まえたものでなければならぬと思う。現に、児童生徒向けの史跡巡りのパンフレット、〇〇のせい息分布図等が親切にも行政から数多く出されているが、結局はそれ

を見て分かったとしてしまい、真にかねらの追求への意欲をそらせるものとなっていない点、私達の領域と、子どもたちの領域を明確にしながら迫らなくてはならないのではないだろうか。

ならば、子ども主体とは、どう受け止めればよいのだろうか。子どもの独自性、柔軟な思考、こうした子どもたちの視点を尊重する、あるいは試行錯誤を許容する私達大人の態度と一対のものとしてとられるべきものである。

実例を示そう。私達のイベントである「子ども会議」は、組織、運営共に子どもたちが行う。全体会では、激しい討議で火花を散らす。分科会では、意見をまとめられずに沈黙の時間を耐えている子どもたちがいる。そして、終われば、果たして自分達に守れるかどうかも定かではないアピールに、大きな拍手をおくる。陳情書もまたしかりである。しかし、ここで、子どもたちは今まで気付かなかった問題を発見するのである。また、陳情書を受けた役所も、その夢を買ってくれる。それが、子どもたちの生を豊かにし、共に生きる共同体意識を芽生えさせる。公害研究所主催の公害セミナーも、大筋この方向で進められており、強く評価したい。

港南区の町づくり絵本、境川のワーク・ショップなどの試みも、今後の子どもたちの参加の



させかたという点から注目し値する試みである。ただし、繰り返すが、大人が子どもを利用したり、子どもの成長する側面を補助し、生きていく力をつけてあげるといふ観点を欠くならば、子どもの上に現れたひずみは一掃されるはずはない。

また、子どもたちの連携という立場から少し

ふれると、一つは『よこはま川をかんがえる会』の試みである水質調査のためのバックテストは、全市的な規模で、子どもたちが毎日できる「自然の監視人」の役に最適のもので、そのまともまで相当工夫し、子どもたちのネットワークづくりまで、是非責任をもって進めていただきたいと思う。

二つには、地域でよく話題となっている子ども会のことである。これは何をしたらよいか、何をさせたらよいか分からないという悩みがその最大のものである。私は、将来、子どもたちのしよって立つ地域共同体を分らせることが、プラスになると考える。従って、地域での人間関係を作るべく老人も子どもも加わってできる、継続的な活動を用意されたいと思ふ。発見団の活動をしてきて、まだこれだというものはつかめていないが、こうした活動のある側面からの追求はかなり面白いと思うし、地域を知らせる、地域で遊ばせることが必要と限定した考えで迫るなら、逆によい発想が生まれてくるのではないだろうか。

## ②—教育がかかえている問題

川調べをしていて、子どもたちが不思議に思った疑問の中に「なぜフェンスがあるのか」という声があった。子ども会議の分科会テーマにま

でしたくらいであったから、よほど異様に見えるに違いない。この時、私は恥ずかしながら、川を見たい子どもと、安全性を考える子どもとの話程度の認識しかなかった。つまり、議論になるだろうぐらいにしか考えが及ばなかった。しかし、実際に河川の問題にかかってくると、子どもたちの直観は的を得て、問題の核心をつくものであった。再三述べてきたように「川の無機化」「川の掃きだめ化」へと連なる自然観から、必然的に生み出された所産であることをとらえる象徴的なテーマでもあったのである。フェンスを乗り越えさせぬ限り、汚い水に手足を触れさせぬ限り、私たちががんじがらめにされている自然観を払拭することはできない。「川に入るな」という約束を見直すべきである。

美しい川の中で遊ばせる大切さも、前に述べた通りである。川ではなくてもよい、自然の中で遊ばせてほしい。遠足、修学旅行、林間学校、施設巡りより、例えば、毎年ある時期円海山に一日全校で遊ぶぐらいの方が、ずっと教育的にも効果があると思う。暴論ではあるが、学校行事は全面的に切り替える時期に来ていると思う。

教育課程の問題について、例えば、六年理科の「生物とその環境」で日当たりや温度・環境の

影響等の要因から解明を図る学習がある。これも、川調べというような立場にたたされた時、本当は一木一草の名前を知っていることの方がどれほど良いか思い知らされた。自然に近づき地域を知るといふ立場からの点検が必要であろう。

### ③—行政の仕事

子ども会議の例から述べる。「小さい緑を守ろう」という議題に対して、小さい緑なんかより、大きく消えていく緑こそ大切である、それ

こそ守るべきではないかという反論がなされた。主催者側の子どもは、量の問題でなく、自らの身近な緑を守ることなくして自然を守るものかと主張した。これが正論であろう。日常生活の中で、川・緑・土・空気の発想を養うことが大切である。

川を暗渠化してしまった功罪は大であり、ふたをする前に、都市河川もまた都市に残された自然であること、子供にとつての大きな遊びの空間ということを認識してほしかったものである。せせらぎ緑道も、こうした反省に立ち、進

められたものと確信するが、自然の生態を直接的に感じられぬものであるのなら、まだまだ反省不十分と言わなければならない。つまり、行政の施策は、自然は残せるだけ残すことを再優先すべきである。

まだまだ、施設としての校庭の公園化、地域センターとしての学校の位置付け等ふれた問題は多々あるが、積極的に子どもたちの環境配慮と住民の意志を尊重して進められることを切望して提言とする次第である。

(港北区大豆戸小学校教諭)